

## [総合的な学習の時間]

# 「劇の創作活動」の教育的な有効性について

—高田世界館で上演した「エスポワール 上杉小発～未来へ」の実践から—

佐藤 幹夫\*

### 1 はじめに

#### (1) 今日の課題から

学習指導要領において、総合的な学習の時間の学習活動のねらいは「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること」<sup>1)</sup>とある。そして学習活動においては、「児童の興味・関心に基づく課題についての学習活動、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題についての学習活動などを行うこと」<sup>2)</sup>とある。

そこで今回は、総合的な学習の時間において、劇の創作活動を行うこととする。この劇の創作活動は、子どもたちの演技力を高め、演劇としての完成度を上げることが目的ではない。子どもたちが熱中して友達と共に探究し表現し、大きな達成感や成就感を得てより良い成長をしていくことを目指す。総合的な学習の時間における内容の取扱いについても学習指導要領内容の事項の(2)に「問題の解決や探究活動の過程においては、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること」<sup>3)</sup>が必要だとされている。

劇の創作活動は、以上のことを含んでいる。本研究を通して、教師が児童と一緒に固有の素材について学び、仲間と協力をしながら一つの目標に向かって劇を創作していくことで、総合的な学習の時間のねらいの達成ができるのではないかと考える。

#### (2) 児童の実態から

当校は、全校児童約70名の小規模校である。担任している6学年児童は、男子16名・女子7名の計23名で6年間、単学級のためにほとんど変わることのない人間関係の中で過ごしている。豊かな個性ある子どもが多い学級である。男子の人数が多いため学習や活動の場面では男子優位の傾向が強くみられ、女子の意見や考えが反映されにくい。そのために、男女の仲もぎくしゃくしており溝が生じている。男子の中でもグループが固定化しており、自分の気の合う友達以外とは交流をもとうとしない様子がみられる。それは、5学年時のQ-Uテストの学級満足度尺度をを図る学級集団の特徴からも表れていた。川村(2006)の言う「自由でのびのびした雰囲気」「クラス内ルールの弱さ」「トラブルの多さ」「小グループ化」「特定の生徒がクラスの主導権を握る」という「ゆるみのある学級集団」<sup>4)</sup>に傾向があてはまる学級の実態であった。

また、一人一人を見ても(表1)の全国学力・学習状況調査の意識調査(2015.4.21調査)からは、自分自身に自信を持てなかったり、自己有用感をもてなかったりすることがわかる。しかしながら、みんなでやり遂げることは大切であり、相手のことを知りたいという気持ちも抱いている。児童は願いをもっているものの、行動するまでには至っていない。中村・平野(2010)は、劇の創作的活動の教育的意義を次のように述べている。

- ・子どもたちのコミュニケーション能力を向上させる。
- ・子どもたちは試行錯誤の末に劇を創り上げ、上演を成功させることによって、自尊感情を得ることができる。
- ・劇の創作活動の経験は、友だちと感動を共有する体験となる。<sup>5)</sup>

そこで劇の創作活動をとおり、上記のことを一人一人に身に付けることが、より良い人間関係の学級の育成になると考える。

\* 上越市立上杉小学校

表1【全国学力・学習状況調査の意識調査（2015.4.21調査）】

質問 番号	質問事項	「あてあはる」の割合		
		自校 (%)	県 (%)	全国 (%)
5	難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか。	4.3 ↘	28.6	25.6
6	自分にはよいところがあると思いますか。	8.7 ↘	36.4	36.3
27	学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか。	73.9 ↗	61.4	54.2
33	人の気持ちがわかるような人間になりたいと思いますか。	78.3 ↗	75.6	72.1

## 2 研究の目的

本研究は、「劇の創作活動」を通し、個性を発揮しながら一人一人が役割を担い、みんなで一つのことを作り上げる達成感や充実感を味わう。さらに自己有用感を高め、仲間とともにかわり合おうとする社会性が育成されることを明らかにする。

## 3 研究の方法

### (1) 振り返りの作文から、児童の達成感や自己肯定感などの変容を見取る

毎回、活動後に自分自身で感じたことや変わったこと・できるようになったこと・次回の課題、その他にグループや学級全体の様子についても作文に書いて蓄積していく。子どもにとっては、その日のことを振り返ることができ蓄積してあるので、いつでも読み返し、自己を振り返ったり変化を感じたりすることができる。教師は、その日の児童の考えや思いなどの様子や変容をすぐに知ることができる。さらに、子どもの作文から子どもがどんな課題をもったのかを見取ることができ、活動内容を設定・変更したり、次のステップへと進めたりできると考える。

### (2) 話し合い活動でコミュニケーション能力を育成する

舞台発表の可否に始まり、テーマやセリフ、ダンス等、劇の創作活動の中には、話し合いの場が多々ある。そして、決定したことは、仲間同士やみんなで一つの方向に向かって取り組んでいかなければ成り立たない。そこには必然的にコミュニケーションが生まれ、かわりが求められる。このかわりの中で、仲間の良い面や新しい一面を発見したり、自分とは異なる考え方に会ったりすることもある。より良くしようと思えば意見の対立も生じる。これらのことは、子どもたちの関係をより広くより深いものにしていくと考える。中村・平野（2010）は、活動を通して子どもたちに高まったものとして、問題解決力・教科的な追究力・自己向上力・相手意識に立った活動力・自己表現力を挙げ、人形劇発表という目的のためにいくつもの課題をみんなで協力し乗り越える中で学級のみみんなの心が一つになってきた（感情共同体）としている。<sup>5)</sup>

### (3) 本物とのかかわりの中で興味・関心をもたせたり、意欲の継続化を図ったりする

中村・平野（2010）は、自分たちの想像力で物語を作り上げそれを演じるというのは、子どもたちにとって魅力的な活動であろう。「おもしろそう」「わくわく」という高揚感は総合的な学習の時間で行う活動に必要である。しかし、その子どもたちのやる気を持続させ、活動を有意義なものにするには教師および指導者の存在が大きい。同じような活動を行ってもうまくいったりいかなかったりするの、子どもが違うという要因もあろうが、教師や指導者が違うという要因の方が大きいように思われる<sup>6)</sup>としている。

そこで、今回は指導者として劇団を主宰し、ダンサーであり振付師として活躍しているゲストティーチャー（以下GT）を招くこととした。現役で活躍している方に直接、技術指導をしてもらったり貴重な体験談を聞いたりできることは、子どもたちの気持ちを高揚させるだけでなく、GTの話から自分の生き方についても考える場ともなる。また、月に1回来校することは、私たちの活動において、モチベーションを持続可能にすると考える。さらに、発表の場を日本最古の映画館である『高田世界館』としたことも、子どもたちには新鮮な気持ちとともによい緊張感を与えることになる。

以上の子どもの姿を実現するために主となる活動を構成し、教師は子どもと一緒に活動しながら適切な支援を行う。

## 4 活動の実際

### (1) 話し合いI：舞台発表を「やる」それとも「やらない」？

昨年度の6年生が総合的な学習の時間において演劇を行っており、東京への修学旅行で劇団の稽古場を見学した。そ

の折に、主催者から出身地の上越市にある日本最古の映画館『高田世界館』で舞台発表を一緒に行いたいという意見が提案された。その意向を引き継ぎ、今年度の6年生が「劇を行うのか、行わないのか」についての話し合いをもつこととした。

最初の子どもたちの反応は、「やる・やりたいと思う」(18名)「やらない・やりたいと思わない」(2名)「わからない」(3名)であった。その後、それぞれの思いや考えを出し合うために、計4回の話し合いを積み重ねた。その結果、全員一致で「やる・やりたいと思う」という方向になった。理由としては、「みんなで団結・協力・一つになれる」(15名)「自分たちの成長につながる」(6名)「やらないで後悔したくない」(2名)であった。子どもたち心の中で、「舞台をやりたい」と言う気持ちが全員に芽生えてきた。教師は、この気持ちを持続させ、具体的な活動の中で「やってよかった」「やればできる」という達成感に導いていくための支援が重要であると考えた。

### (2) 話し合いⅡ：どんな物語にしようか？

主題は、「未来の自分・将来の夢」とし、一人一人が登場人物となることを前提として話し合いを進めた。しかし、子ども自身が将来の夢や未来の自分を想像することは、漠然としていてイメージがつかめないようであった。そこで、自分が今熱中していることやこれからやってみようことから話を進めることとした。話し合いを重ねていくうちに、少しずつ意見が出るようになり、似たような考えをもった子ども同士をグループにして話し合いをすることにした。グループは、①人に教える仕事をしたい(保育士・先生)②今やっているスポーツを続けたい(サッカー関係、サッカーJリーグ)③音楽活動をやってみたい(音楽関係・ミュージシャン)④ものづくりをしたい(設計士・大工)⑤県外や国外で活躍したい(デザイナー・パティシエ・未来の自動車設計など)の5つとなった。

その後、グループで話し合った内容をもとに教師と一緒に台詞や話の流れをまとめていった。その中には、現在の自分たちの様子や地域の現状を踏まえて、自分たちの思いや願いも織り込むようにした。主題に沿った5つの場面設定とし、その前後をプロローグとエピローグで挟む形式とした。

また、タイトルについても意見が分かれた。学年の通称が「きぼう学年」ということと劇の内容が「未来に向かっていく」という理由から、それに関連するタイトルが良いという考えが出た。「きぼう」「エスペラル(ポルトガル語)」「エスポワール(フランス語)」「ホフムング(ドイツ語)」の4つの候補が残り、最終的に劇のタイトルとなる「エスポワール」に決定した。この話し合いの様子は大切な部分であり、その様子を台本として劇中のプロローグの場面とすることにした。

### (3) 本物との出会いⅠ：GT(ゲストティーチャー)はすごい！

5月、台本も出来上がり各自がセリフを覚えた。次は、声を大きくするための腹式呼吸の仕方、滑舌をよくするために言葉遊びなどを使つての発声の練習を朝の会で続けた。しかしながら、演技やダンスを教えることは専門性のない私自身も難しかった。そこで、昨年度舞台発表を提案した地元出身の振付師・ダンサーであるGTに指導を依頼した。これが、子どもたちにとっての本物との出会いとなり、ダンスや演劇表現を実感していくこととなる。初回は緊張気味の子どもたちであったが、GTの人柄に触れていくうちに自然と振る舞えるようになった。以降、毎月1回のペースで指導してもらった。スモールステップで教えてもらえるので、児童も興味・関心を持続して参加していた。

GTは、子どもらと対話をしながら、ダンスや劇を作り上げていった。その中で、子どもたちは、「限られた時間で集中して作ることの大切さ」を学んだ。また、次回までに、「音楽に合わせて連続でできるようにする」などの課題が必ず出される。このことを克服することが、次までの児童のモチベーションとなっていた。中村・平野(2006)は、GTは、その分野について高い専門性が必要とされる。しかし、それを教え込もうとするような旧態依然とした教師イメージをもつのではなく、子どもと共に学び、共感し合う豊かな人間性が必要である<sup>7)</sup>と述べている。まさにそのとおりであると感じた。

○少し遊んだりダンスをしたりするうちにズキさんとならできるかもしれないと思うようになりました。・・・やるからには、みんなのあしを引っ張らないようにがんばりたいです。そのために1か月に1回教えてくださる練習に真剣に取り組みたいです。そして、本番の発表の時には堂々と楽しく発表できるように自分のできることを精いっぱいやりたいです。

○ぼくは、ダンスと演劇ではどちらかと言えば演劇が好きでダンスは「苦手だな」と実感していました。・・・でも、ズキ拓朗さんのおかげでダンスに自信がもて、少し安心することができました。それはズキさんで行ったダンスが楽しかったからです。・・・今日の活動をとおして少しでもダンスを好きになれました。これからたくさん練習を積み、世界館の発表も可能だと思います。

#### (4) 本物との出会いⅡ：『高田世界館』ってこんな歴史があるんだ！

6月、自分たちが立つ舞台である高田世界館について調べ学習を行い、その後、現地で映画館の管理人さんから話を聞く機会をもった。今年で104年目を迎えることやスキーで有名なレルヒ少佐とのつながりがあること、西洋の建築を参考にしたことなどの自分たちが調べた以外の歴史を知ることができた。何よりも自分たちが演じる舞台を客席から見たり、歴史を感じたりすることは児童の意欲を高めることとなった。実際に現地を訪れ、客席と舞台という異なる視点から自分の発表を想像することで子ども自身が緊張感を感じることもできた。教師からも、期待と不安が入り混じる子どもたちの様子が感じられた。

- 自分が立つ舞台を見て、ほくは緊張しました。大勢の人が集まる場所でやることができるのだろうか。まちがえずにできるのかが少し心配になりました。しかし、「できると信じないとできない。」と思いました。そして、この舞台を見て「やる。いや、やらなきゃいけない。」と強く思いました。
- ・・・（中略）こんなすごい場所に立たせてもらって演劇ができることはすごくうれしい気持ちもあります。でも、少し不安になる気持ちもありました。だから、今度からは「絶対に成功させる。」「観客席をいっぱいにするぞ。」というくらいの気持ちで、今よりももっとがんばっていきたいです。

#### (5) 本物との出会いⅢ：夏休み集中練習 劇団のメンバーが来てくれた！

夏休み中の2日間、GTが率いる劇団のメンバー6名が舞台発表に向けて各グループに1名がついての指導となった。1日目は、グループのダンスの動きと台詞の言い方についての練習、2日目は、オープニングとエンディングを含めた全員ダンスの練習、そして最後に通し稽古を行った。所々で、発表がよりよくなるように修正を加えてもらいながら、熱心な指導をしてもらい、子どもたちはそれに応え真剣に練習を行うことができた。多くの子どもたちが、この集中練習で上達したことを実感していた。

- 今回は、みなさんのアドバイスでダンスが大幅に変わりました。前よりも動きがおもしろいダンスになりました。そして、だんだんダンスを覚えられるようになりました。まだ、完全とは言えませんが80%ぐらいは、おどれるようになりました。
- 今日は、全員で行うダンスの練習もしました。拓朗さんから教えてもらいみんなで楽しくダンスをすることができました。グループで練習しているダンスより、拓朗さんの考えた振付の方が体力も使うけれどもまっすぐ踊ることができました。

#### (6) 話し合いⅢ：より良い発表を目指して課題を克服できるのか？

夏休み中の練習のビデオを視聴し、みんなで振り返りを行った。ダンスの動きや流れはだいぶ良くなったが、より良い発表にするために、さらにできることについての意見を交わした。課題として、「まだ声が小さい」「もっと動き・ダンスを大きくする」「台詞を言うのが速い」「緊張しすぎている」「間違えると下を向く」「自信がないように見える」「はずかしがっている」「心が一つになっていない」についてできる意見を出し合った。

しかしながら、「心が一つになっていない」については、学級としての最大の課題であり、更に話し合いを深め、以下のように取組むこととした。

- 日常から、みんなで遊んだり話をしたりする時間をつくる。相手を思いやる行動をとる。
- お互いにあいさつをしたり、励まし合ったり、注意し合ったりする。言葉遣いにも気を付ける。
- 学校の活動の中で、リーダーシップ・フォロワーシップを発揮する。

平田（2007）は、プライオリティー（優先すべきもの）を把握する能力を身につける機会を学校教育の中に盛り込んでいかなければならない<sup>8)</sup>と言う。活動が深まるにつれ、子どもたちが何を優先すべきかについて、グループ内や学級で意見を交わす場面が多くみられるようになってきた。この頃になると、グループの仲間やクラスみんなで行うことの大切さを意識できるようになっていた。課題は山積しているが一つ一つを克服することが、クラス全体の成長につながると考え、子どもたちには今は大変でも得ることは大きいと励ました。

#### (7) 本物との出会いⅣ：高田世界館の舞台でいよいよリハーサル！

現地リハーサルは、2回ともGTにも来てもらい、本番同様の出入りの仕方や舞台での立ち位置を確認し、一連の流れの中で修正すべき点を指導してもらった。



写真1 【高田世界館でのリハーサル風景】

- 今のみんなは、最初のころよりは、大きな声がでていると思います。でも、まだ心が一つにはなっていないと思うから、お互いにフォローしながら全員が心一つにしてがんばりたいです。1回1回の練習が大事だと思うので、がんばって練習していきます。
- 今日、衣装を着てセリフやダンスを合わせました。まだ、ぼくはセリフが棒読みなので、もっと心をこめてセリフを言った方が良くと拓朗さんと先生に言われました。衣装を着てみるとダンスが少しやりにくくなってしまいます。それを考えてダンスの振りをもっと大きくしたいと思いました。他のみんなは、とってもダンスやセリフの言い方が上手です。ぼくも負けずにがんばらなければいけません。あと本番まで1回1回を本気で練習をします。

このように感想にも、仲間のよいところに気付き、よいものを作ろうとする気持ちが表れてきた。現地練習を終え、本番の舞台に向けての意気込み・伝えたい思いは以下ようになった。(複数回答)

- お世話になった皆さん、ずっと支えてきてくれた方への感謝の気持ちを伝えたい。(18名)  
 ○頑張っている姿をみてもらいたい。(4名) ○一つになっているところや団結できるところを見てほしい。(3名)  
 ○見に来てくれる人に感動を与えたい。(1名) ○自分たちの成長した姿をみてほしい。(1名)

(8) 本番公演『エスポワール』：みんなの心一つに！

本番では、真剣な表情で舞台に立ち、声高らかに台詞を言う子どもたちの姿に感動した。当日まで毎日のように繰り返し練習した成果が十分に発揮された舞台となり、子どもたちの成長を感じた瞬間でもあった。2回の公演で300名を超える人から見てもらうことができ、大変有意義な時を子どもたちは過ごすことができた。子ども自身も楽しく発表することができたと満足し、お客さんを送るときには、皆さんからのお褒めや激励の言葉をたくさんもらい充実感・満足感を感じていた。

表2 【本番を終えて：練習や本番の舞台を通して学んだこと！ 変化したこと！ (23名全員の回答)】

児童	自分自身	学級自体・友達
A	自分でも気付かなかった自分に会えた。	学級のみんなが仲良くなれたし、団結するようになった。
B	堂々と発表できるようになった。	団結力が深まった。
C	大きい声が出たり、はっきりと言えるようになったりした。舞台が楽しいことがわかった。	一つになったと思う。男女とも仲良くなって協力できた。
D	堂々とできるようになった。	団結力が高まった。
E	はずかしがらずに発言してみようと思うようになった。	男女が仲良くなったと思う。発言する人が増えた気がする。
F	みんなと団結できるようになった	男女一緒に協力していた。
G	自分に自信が持てるようになった。	団結・協力できるようになった。男女の仲がよくなった。
H	たくさん練習(努力)すれば、すぐ上達することを学んだ。	みんなで協力すれば、大きな力になりどんなことでも成功できることを学んだ。
I	あまり話をしなかった人と話せるようになった。はずかしがることが少なくなった。	絆が深まったと思う。団結すれば大きいことができることを知った。仲良くなった。
J	声が大きくなった。	みんなも声が大きくなった。団結した。
K	はずかしがらずに、堂々とできるようになった。	仲良くなったと思う。
L	協力する大切さ。	男女の仲が深まった。
M	みんなで協力してやり遂げること。	団結力。
N	自分に自信がついた。	授業中、騒がしかった学級が静かになった。
O	堂々とダンスをしたりセリフを言えたりできるようになった。	みんなが協力してできるようになった。
P	声が大きくなったし、動きも大きくなった。	みんなのダンスがすごく合ってきた。
Q	はずかしさがなくなった。	団結力が高まった。
R	協力することの大切さを学び、前より仲間を思いやれるようになった。	前より仲良くなったと思う。
S	いろいろな人へのありがたさを改めて知った。大きな声も出たし、最高の思い出になった。	協力してできたし、不安な時も友達から温かい声をかけてもらい、やる気がでた。
T	自分に自信をもてるようになった。	みんなが一つになって協力できるようになった。
U	一人一人のよいところなどをみつけられるようになった。	団結力が強くなった。
V	人前でも堂々とセリフを言ったり、ダンスをしたりできるようになった。	男女がなかよくなった。
W	心一つにすると楽しく感じた。力を合わせるができるようになった。	みんな仲良く遊べるようになった。

以上、「協力する大切さ」「団結力が高まった」「自信がついた」「仲良くなった」と感じる児童が多かった。これは、その後の学級活動や学習の様子にも反映されることとなった。12月末、学級内でミニライブを開催した。以前に行った時は、傍観者的で、発表している人を盛り立てたり共有したりする様子は少なかった。しかし、今回のミニライブでは、見る側の意識が高まり、一緒になって楽しもうとしたり、発表者を盛り上げたりすることができるようになり、クラスの一体感を感じとることができた。

## 5 研究の成果と今後の課題

### 【成果】

☆自己表現力・自己肯定感が高まった・・・最初は、自己表現することに抵抗をもつ児童もいたが、GTから直接指導を受けることで表現活動にとっても興味・関心をもって取り組み、自分から進んで活動できるようになった。GTの演技指導を通して、より相手に伝わる表情や動き、セリフの言い方等を学び、実践することで、表現力が高まった。子どもたちが自己表現に対する抵抗感が少なくなったことを実感できた。また、グループでダンスを創作したことも、意欲をもって積極的に練習に取り組むことにつながった。ともに声をかけ合い、励まし合い全員でよいものを創り上げようという熱意がみられた。たくさんのお客さんやお家の方々に認められたことや、ひとつのことをやり遂げたという満足感や達成感を得たこと、「自分に自信がついた。」というコメントからも一人一人の自己肯定感の高まりを感じた。

☆友達と感動を共有できた・・・振り返りの作文の中で、「協力する大切さを感じた」「友だちと一緒にやると楽しい」と記述する児童が日々多くなっていた。さらに、本番の舞台を終え夕食会での一人一人の感想発表でも、「みんなが一つになることができた」「舞台上で演じることが楽しかった」など、各自が達成感や成就感を得ていることが感じられた。一つのことを目指し協力し行うことで、お互いの気持ちや思いに気付けるまでに成長していた。

☆コミュニケーション能力や課題解決能力が高まった・・・劇練習を通して子ども同士でアイデアを出しあい、セリフや動きを考えることができた。そのことがコミュニケーション能力を育て、よりよい関係づくりにつながっていった。グループごとに劇を見合いお互いにアドバイスしたり、撮ったビデオを見て全体の声の大きさや話す速さ、大きな動作の大切さなどに気付き、「よりよいものにしていこう」という意識を共感したりできるようになっていた。また、本番の舞台上がるまでに多くの人が支えてくれたこと、足を運んで見に来てくれたお客さんがいることに対し、感謝の気持ちを伝えたいという心の成長も感じ取ることができた。

### 【課題】

本研究は、先行実践も少なく、私自身も初めての試みであった。そのため、手探りの状態で計画から実践を行ったので、その場その場での対応に追われてしまうことがあった。初めから有効な手立てや方法を、総合的な学習の時間だけでなく年間指導計画に位置付けていくと今回よりも良い成果が表れると感じる。

今回は、活動を計画して実行するための講師や予算の面で調整ができたので、新たな体験を児童と共にすることができた。今後、同じようなことを行おうとしても条件が整うとは限らない。近隣地域の講師の人材発掘、利用可能範囲内の発表場所の情報収集や発表場所を縮小して行うなどの工夫が必要である。

### 【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省 『小学校学習指導要領』 2008年 P110
- 2・3) 文部科学省 『小学校学習指導要領』 2008年 P111
- 4) 河村茂雄 『学級づくりのためのQ-U入門』 2006年
- 5・7) 中村康之・平野朝久 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I 総合的学習における「劇の創作活動」の教育的意義 総合的学習単元「劇作りプロジェクト」の事例の分析を通して 2010年
- 6) 長野県伊那市立伊那小学校 公開学習指導研究会研究紀要「内から育つ一人ひとりの子どもが自らを高めていく学びの道筋」 2004年
- 8) 中村泰之・平野朝久 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 『総合的学習におけるいわゆるGTの役割と課題』 33-44 2007年
- 9) 平田オリザ 『コミュニケーション力を引き出すー演劇ワークショップのすすめ』 PHP研究所 2009年